

狸學と文學

川口孫治郎

狸は、面壁三年、化けるなら達磨か少くとも大入道とうつて出やうといふ。狐に比しては男性的である。機嫌のよい時は、所謂面白狸の腹鼓を打つて、月の夜にあこがる。風流漢である。併し狐に比べては、總計に於て、何處にか少しノロいところがある、それ丈又一方に可愛のところが多い。世人は、一本繩で馭へない男に、兎もすれば古狸とアダ名をつくるが、狸はさう煮ても焼いても食へないほど性質の鍛い上げられたヤンチャンではない。誠にやさしいところのあるものである。但し獸の序であるから一寸いつておくが、彼の肉は異臭があつて、昔の皮商賣をして居つた人々でもあまり好まないといふ噂である。彼の種族の中で「シバオリ」といふものが、穴居のみの狸よりは皮が上等である。共に日本の昔の鍛冶の鞆の中の空気を吸引し及び吐出する唯一の大きな瓣に専用せられて居つた。毛は現今でも筆の毛として重せられ

て居る。彼を御承知ない方々は、彼が「ソマトーゼ」とかいふものを呑んで十倍強になつたものが、熊の出来損いであると想定すれば、大した間違は一寸ない。顔付などは何處か親類でありさうにも見ゆる。

比古兵衛さんといふのは、吾輩の隣村の朴直な昔氣質の善い百姓の老爺であつた。

彦兵衛爺の頭には、殘んの雪を戴いて、其端に小やかな丁髷が、蜻蜒や何の味ある壺の先といふ風情で、後の方、左に斜にそり返つて居つた。何時も、淺黄の褪せた短かい仕事着の下に、膝頭の抜けて脛までの同じ色の股引を穿いて、ドンヨリとした水色の處々はつれかけた帯が環のまゝ、將に脱して脚下に落ちんとして辛うして臍骨に支へられ、其結瘤が總をなして後方にブラ下つて居る、其意氣なところは今の東京の書生どもがやつて居るものゝ最もハイカラなるものにも匹敵すべくあつた。但し爺さん自身はそれが高襟なるか蠻襟なるか、扱は中庸襟なるかを少しも知らない、唯それが彼の常習であつたのである。

鳥は鳴かぬ日はあつても爺さんの働きに外出しない日はなかつた。仕事の仕振は頗る優長であるけれども、確に勤勉家であつた。

其外出するには何時も、夜明け染といつて、白木綿の端を角から一寸田舎紺屋の藍壺に浸けて、早速引上げて水で洗つて、青い角から漸次にぼけて白いところに夜明けと名のついた其手拭の從來幾多の寒暑を凌ぎ來りしものを、いとゆるやかに鉢巻に試み、ヤオラ身を起さんとするに當り、腰なる「火の用心」としるされた油合羽の煙草入から、指頭に今一服を摘み出して、其眞黒な處々眞鍮の磨れ光のする煙管につめて、爪先の處に細い煙を上げて居つた前の吸殻を押しひつつけて、スバ／＼二三度吹かした上で、口の隅から斜左前下へつき出すべくくわへ、茲に始めて傍なる手頃の鍬を突張つて立上がり、頓がて之を右の肩にして其柄を端近く全腕の中頃で押へて三十五度の角度を保ちて支ふべく手首は自然のまゝにうなたれて居る。之が彼の常例であつた。

師走の未つ方、外よりは内の忙はしい押迫つた廿

六日といふに、彦爺相變らず山田山畑の見廻りに出懸けて、頓がてそろ／＼家路に廻り歸らうとする、未だ入日が少し東の山の巔にのこつて照して居る頃、山裾の深い小溝の涸れてしまつて今は唯落葉のみ溜つて居る中と、恰度此方彦爺の行く手に向ひて、黒褐色のムク／＼太つたものが、やつてくる。感揚迫らざる爺も、オヤツと氣がついて、常には似合はぬ敏捷に、細き其深溝を跨いで、肩なる鍬を、大上段に構へた。凝然たる其風、巖乎たる其態、蓋し天下の壯觀の一であらう。少くとも彼は第二十世紀の動物學者の一人たる資格があつたのである。

之は、狸や蝮などが未だ氣付かぬ前に、人が逸早く彼等を認めて、不動盤石の姿勢態度で、眼に我から霞を被ぶせて立つて居れば、彼等の眼は俗稱「ハリ附け目」といつて、人の待ち構まへて居るのも知らず、ズン／＼此方にやつてくる、踏み付けらるゝまでもやつてくる。唯それまでに常人は辛棒しきれなくて、身動をするとか、殊に睛をチラと動かすとかするものであるから、中途彼等に

氣附かるるのみで、此方だに此要領を呑み込んで居れば、盡く此方の所有になるのである。といふことを、彼彦爺は夙に了知して居つたからである。但し彼の傳聞であつて、實驗をやるのが今度が、生來始めてゐたらしい。

愈、狸が間近くやつて来た、無念無想で待構へて居つた彼爺も、此一撃に、其丈夫な狸が、我物と思へばうれしゝゝの先、思はずブル〜と震つて、驚喜の凝つた大喝一聲、柄も折れよと許に打下した。

但、あまり力が入りかぎて、大切の鍬が溝の片側にぶつ附かつて、大カブリを躍つて振つた丈で、肝腎要めの狸には、砂の飛走りがかゝつたまで、何の打撃もなかつたのである。併し狸は早や首を西方浄土の方にして往生して居る。

思ふこと儘になるもならぬも此世の習、と淡く悟つた六十六の今年まで、はんとうに思ふ通りにいつたことが唯これ一つ。枯木の如き彦爺も、此時ばかりは顔色春めいて見えた。餘程うれしかつたと見ゆる。

うれしい時や、悲しい時には、智者にも千慮の一失、古今東西の歴史を繙く毎に、切に此感を深くする。

あはれ彦爺も、此大功名の現状を誰かに見てもらいたい、のであつた。日は早や没つてしまつた。やう〜七八町向ふを歸り行く樵夫が一人おぼろに見ゆる。彦爺、早速に呼かけて、

「おーい、狸をとつたぞー、来て見んかー」と嘯いた。

何か異變でもあつたかと、心配げに、樵夫が折返して来て、聞けば、狸一匹とつた、といふ丈の話。

扱、その實物はと見ると、丸で影もない。

怒るまいことか、根が正直な單純な田舎者であるから、樵夫の此時の憤慨といつたら、殆んど類例を見ない位のものであつた。

「従兄弟同志の己れを、心配させて茲まで駆けて来てみれば、ありもしない狸をとつたなど」と小言をいふ、彦爺も頗る狼狽で、唯「あつたのだ、」

「此に轉がつて仆れて居つたのだ、などと頻りに申譯と失望と不思議と残念とに、今在つたのに

く、と繰り返してばかり居つた。

怒つぽい丈に、なほりも早い、樵夫にも彦翁のウロたへて居る有様の偽ならぬが感應したものと見え、「オイ彦さん一處に歸らう！前は有りもしない狸か何どにつまゝれ、おれは又お前に一寸つまゝれたわけだね！何うでもない、や！とサラリと一笑に附し去つた、彦翁をつれて共々に歸つて来た頃は、日がもうズンブリと暮れて居つた。思ひ切りのよい彦翁も此途中で「どうも確に僥れて居たのに」とくりかへし 内へ歸つてからも、尙ほ其氣色が揚らず切に獨りで殘念がつて居つた。翌日之を聽いて、吾輩は切齒扼腕憤慨した。吾輩は憤慨といふことをあまり好まない、又それをやる丈の必要を認めたことは今日まで殆んどなかつた。唯此時丈は、非常に憤慨した、彦翁が可愛想で、其胸中の遺憾を察して、氣の毒のあまり、吾輩の生涯中に空前であり絶後なるべき憤慨を、今からいへば早や十五六年前にやつてしまつた。今考ふれば、彦翁も可愛いし、狸も可愛いのであるが、當時は唯もう彦翁にのみ、多大の同情を賤い

て居つたのである。是に於てか吾輩は斷乎として、狸を生擒すべき作戦計畫に肝膽を砕くことになつたのである。

丁度用事があつて二週間計滞在することになつた駒場出の農學をやつた親類のものが、滞在中に、中學校に持つて歸る標本を漁獵つて居ることを、耳にしたから、早速此方から、狸狩りの申込みをした。彼も「貴様の熱心は頼母しい」などと頻りに我輩を誠しやかにおだて、居つた。何しろ彼は三十近い男、此方は其半分の小供、併し毎日連れだつて、あさつて歩いた。彼が求むるところは、何でも来いといふ廣い意味の採集であるが、我輩の求むるところは、唯彼彦翁の爲に、恥を雪ぎ、奇麗に復讐をしやうといふ一念のみであつたのである。

二週間で、一度ちらと彼狸の影を認めたが、彼は我より逸早氣づいて逃げてしまつた。併し天は我輩の義心を認めしものか、農學士先生明日は愈歸任するといふ其前の夕方、即ち最後の獵の歸り路に於て、端なくも、我輩は我輩のつけ狙つて居つ

た當の仇、狸公を町餘の彼方、蜜柑畑の石垣の下に認めたのである。我輩は農學士君の袖を曳いた。彼、「一發で留めて見せる！」といつて銃を擬せんとした。我輩は其銃身を押さへ止めさせた。今でこそ一介の野武士の果、我等の祖先に、若し時の有司の私曲を容るゝ能はざりし潔癖なかりしならば、我等は今日堂々たる世襲武士とあるべきもの、世が世なりとも魂は依然として武士ではないか、武士は容易に刀を抜かない、容易に發砲しない、それが武士道である、射撃道である。我輩は彼狸を生捕りにしやう、とたしなめた。農學士の從兄、ニツと笑つて、「誰がそんな小理屈を貴様に教へた、生意氣なことをいふ、といつて、然らばドウして生捕る」と我輩に反問した。

吾輩の意見は、素敵にかどかして狸の度膽をひつこ抜いてしまはう、といふにあつた。

從兄は然らばと、藥笥の先から彈丸を拔らとつて空砲を狸の眞の意外に被ぶせんとした。吾輩は復た、之を遮つた。狸も鐵砲の音を聞いては如何程度膽が抜け腰骨が外づれても一生懸命で逃げてし

まう。負傷してさへ然うだ、況んや空砲をやでゐる。狸を馬鹿にしては此方が馬鹿である。文明の武器は今、狸も知つて居る。今の聰明な狸に對するには頗る太古的方法がある、其策はシカウカウカウと説明したが、茲に至つて從兄め、クス／＼笑ひ出した。我輩は三たび彼をたしなめた、獲物は早や眼前に來さうになつて居るに、笑うとは何事だ。

「已れは明日歸校するから、貴様には復一寸遇へない、今日は何事も貴様のいふ通りにしてやる」と彼從兄め、全く我輩の意見通り、可笑しさを我慢して顔をしかめながら、石垣の角を先廻りして、狸の廻り來るを待ち受けて居る。愈、狸此角を廻つた其一轉瞬、聲山谷に震ふともいひたい大喝一聲、「タヌ公、來たか。」コロリと僵れた。

ハハ……成程仆れた、「オーイ君來たまへ」とよぶから、吾輩は「そこを押しへる」と注意を與へつゝ、走り寄つて、二人で用意の麻繩を取り出して、狸が突然の驚きに擬死して居るのを、首の左側から右の腋下にかけて縛しめて、其綱を引

張つて彼を歩かしてつれ歸らうとしたが、狸飽くまで死んで居る。併し突然に噛み付かれないやうに用心しながら其腹をみると可笑しいことには、呼吸をするにつれて鼓動がして居るから彼は矢張所謂狸を極めて居ることがわかる。

仕方がないから、畑の竹塙の棒を引抜いて、真中にブラ下げて、二人でかづいて歸つて、獸圈に入れてやつたが、狸まだ死んだ態をして居る。併し此方は彦兵衛さんのやうに決して油断をしないから、何とも逃げ出しやうもない。加之此方から牛肉の御馳走を差上げておいたのだから、多少はづかしがつたと見え、到頭其夜の十時、家の一同が就寝する時中で、まだ死んだ態で寝て居つた。

翌朝起きて見ると、彼狸も與へられた肉を早や食べてしまつて、ノコノコ隅の方に顔を向けて歩いて居つた。

使をやつて此旨、例の彦爺に報知してやつた。爺早速、來訪して、ほんに過日のに能く似て居るといつて、大喜であつた。

此狸を、二ヶ月程経て後、例の從兄の奉職して居

つた學校に生きた標本として寄附しておいた。五年の後、吾輩は旅行の際、立寄つて、狸公を久振りて機嫌をたづねてやつて見たが、彼平氣な顔で、有難うともいはず、又貴殿の計略によつて今は斯うしてと泣言もいはず、何れかといへば、安樂に肥え太つて、呑氣にノコノコして居つた。今でも多分生存へて、幾多年少學生生徒の研究上の參考になつて居るだらうと思ふ。

▲米國感化院の成績　米國が今日まで感化院設立の爲に費したる金額は五千万圓にして毎年の維持費は凡そ一千二百万圓なるが斯く莫大なる金額を感化院の爲に費すは全く無益の事にして悪少年は之に依りて何等の改善を見ずと云ふもの少なからず右に就きて或人の調査したる所に據れば充分此金額に値ひする効果ある由にて感化の効ありと認めて退院を許したるもの、中少なくとも七割五分は正業に就く割合にしてシカゴにては感化院を出でたるもの、收入平均一人一萬圓ありと云ふ

———
V字の鳥